

京都大学人文科学研究所共同研究実績・活動報告書

(1 年計画の 1 年目)

1. 研究課題

舞台で街頭で——60年代は踊りをどう変革したか(日仏比較舞踊学の試み)

On the Stage, in the Street: How The Sixties Changed The Dance (A Comparative Dance Study in Japan and France).

2. 研究代表者氏名

北原 まり子

Kitahara Mariko

3. 研究期間

2018年12月 - 2019年03月(1年度目)

4. 研究目的

1968年の「五月革命」から50周年を迎えたフランスで、舞踊学では初めて、当時の舞踊界の動向に焦点をあてた研究書が出版されることになった(I.ロネ、S.パジェス編『*Danser en 68, Perspectives internationales*』2018年12月刊行)。これは、2014年に発表されたパリ第八大学舞踊学科のチームの研究成果(『*Danser en Mai 68*』)に基礎を置いている。それによれば、フランスの舞踊家たちは当時、より認知されていた姉妹芸術(音楽、演劇等)と同等の地位を求め社会的な活動を行った一方、実験的・政治扇動的作品をほとんど生み出さなかったという。日本の同時期の「政治の季節」も、とりわけ舞踊学の分野ではほとんど顧みられることがない。1959年に創始された暗黒舞踏が、「肉体」という言葉とともに当時の社会的機運を反映していたと認識されるのみである。日本の舞踊家たちは政治活動にグループとして参加することはわずかであったが(舞踊人青年協議会等)、1960年安保闘争前後に若い世代の台頭と実験的な試みの噴出が見られ、フランスの状況とまさにコントラストを示している。当時の状況を調査し、貴重な証言を集めて、フランスの先行研究を基礎にその時期を分析することで、日本の舞踊界の特殊性を新たに発見できると考える。

5. 本年度の研究実施状況

論文集『*Danser en 68, Perspectives internationales*』(2018年)の出版を受け、編集責任者の一人であるシルヴィア・パジェス氏および寄稿者であるパトリック・ドゥヴォス氏と、1960年代の日仏舞踊状況に関する意見交換を行った(2018年12月～2019年1月)。来日したパジェス氏と班員全員は、2019年2月25日に京都大学人文科学研究所にて第一回

研究会「日本とフランスの 60 年代舞踊情勢の比較」を開催し、日仏比較に基づく相違について議論した。その結論をふまえて 27 日に、公開国際シンポジウム「街頭で、劇場で、舞踊の 60 年代——アクション／リアクション」を東京大学駒場キャンパスで開き、パジェス氏、ドゥヴォス氏、北原、宮川が登壇した（登壇予定であった長谷川六氏は肺炎のため急遽欠席*）。翌 28 日に慶應義塾大学三田キャンパスにてパジェス氏による講演会「戦後のフランスのダンス状況と 1978 年の舞踏ショック」を開催した。その際、ドゥヴォス氏、北原、宮川もコメンテーターとして登壇し、聴衆との活発な議論が展開された。*当時の証言者の方々は高齢であり、京都までお越しいただくのは困難であったため、第二回及び第三回研究会の開催地は東京としていた。

6. 研究成果の概要

60 年代「政治の季節」と舞踊界の関係を明らかにする研究は、当時ポスト・モダンダンスが興隆したアメリカではすでにあつたが、80 年代のヌーヴェル・ダンスに歴史的重点を置いてきたフランスでは 2014 年によく口火が切られたばかりであつた。日本に関して言えば、そもそも政治的な活動と舞踊芸術を結びつける研究がほとんど存在せず、演劇研究でしばしば論じられる 60 年安保闘争や 68 年の大学紛争との関わりは、暗黒舞踏派を例外として、舞踊においては皆無であつたかのように見なされている。本研究では、50・60 年代の膨大な量の『週刊音楽新聞』を通覧することにより、当時の舞踊家達の政治活動の痕跡を発見した。また、そうして収集した作品群の中に現れる「黒人」表象に注目することで、政治的な主題が革新的なダンス美学を生み出した事実を指摘し、日本の戦後舞踊史に新たな視点を導入した。さらに、日仏の共同研究のかたちで議論を重ねたことにより、一国の舞踊のケーススタディを超えて、自民族中心主義の視点を回避する、踊る身振りの世界的な循環という歴史的展望を提示するに至った。

7. 本年度の研究実施内容

2019-02-25 日本とフランスの 60 年代舞踊情勢の比較——シルヴィアーヌ・パジェス氏をお招きして

『Danser en 68 : Perspectives internationales』（Isabelle Launay, S. Pagès 著、Deuxieme Epoque 社、2019 年 1 月）について

発表者 シルヴィアーヌ・パジェス

革命への郷愁、前衛、資本主義——アンビヴァレントな 1960 年代の舞踊表現

発表者 宮川麻理子

1950 年代半ばから 1960 年代半ばにかけての舞踊人による社会運動と前衛の台頭、そして 1968 年・・・？

発表者 北原まり子

2019-02-27 街頭で、劇場で、舞踊の 60 年代——アクション／リアクション（日本とフランスの

比較を通じて)

五月革命に踊る

発表者 シルヴィアーヌ・パジェス

《アルジェリアに行きたい》(1960年)——戦後のダンスにおける〈黒人〉の表象を巡って

発表者 宮川麻理子

舞台以外で起こったのか? Partout sauf sur scène?——日本のダンス 60年代〈革命〉の場所

発表者 北原まり子

コメンテーター パトリック・ドウヴォス

2019-02-28 シルヴィアーヌ・パジェス氏来日講演会

戦後のフランスのダンス状況と1978年の舞踏ショック

発表者 シルヴィアーヌ・パジェス

コメンテーター パトリック・ドウヴォス

コメンテーター 北原まり子

コメンテーター 宮川麻理子

8. 共同研究会に関連した公表実績

・公開シンポジウム「街頭で、劇場で、舞踊の60年代——アクション/リアクション(日本とフランスの比較を通じて)」(2019年2月27日、東京大学駒場キャンパス)

・公開講演会「戦後のフランスのダンス状況と1978年の舞踏ショック」(2019年2月28日、慶應義塾大学三田キャンパス)

・研究論文「舞台で、街頭で——60年代は踊りをどう変革したか」北原まり子 『舞踊學』、東京:舞踊学会、2020年3月発行

9. 研究班員

所内 小川佐和子

学外 北原まり子(早稲田大学・パリ第八大学)、宮川麻理子(千葉大学)

10. 共同利用・共同研究の参加状況

区分	機関数	参加人数				延べ人数			
		総計	外国人	大学院生	若手研究者	総計	外国人	大学院生	若手研究者
所内	1	1 (1)	0	0	1 (1)	1 (1)	0	0	1 (1)
学内	1	1	0	0	1	1	0	0	1

		(1)			(1)	(1)			(1)
国立大学	3	3 (2)	1 (1)	0	1 (1)	6 (2)	2 (0)	0	2 (2)
公立大学	1	1 (1)	0	0	1 (1)	1 (1)	0	0	1 (1)
私立大学	4	8 (6)	2 (2)	6 (4)	0	10 (8)	2 (2)	8 (6)	0
大学共同利用機関法人	0	0	0	0	0	0	0	0	0
独立行政法人等公的研究機関	2	2 (1)	0	0	1 (0)	2 (1)	0	0	1 (0)
民間機関	11	11 (6)	0	0	0	18 (6)	0	0	0
外国機関	1	2 (2)	1 (1)	1 (1)	0	4 (4)	2 (2)	2 (2)	0
その他	23	23 (15)	0	0	1 (1)	35 (22)	0	0	1 (1)
計	47	52 (35)	4 (3)	7 (5)	6 (5)	78 (46)	6 (4)	10 (8)	7 (6)

※()内には、女性数を記載

11. 本年度 共同利用・共同研究を活用して発表された論文数

参加研究者がファーストオーサーであるものを対象

総論文数	1(0)
国際学術誌に掲載された論文数	0(0)

※()内には、拠点外の研究者による成果(内数)を記載

12. 費目の 30%を超える大幅な変更があった場合の変更理由

なし

13. 次年度の研究実施計画

なし

14. 次年度の経費

なし

15. 研究成果公表計画および今後の展開等
最終報告書に記載